



# 親鸞の生涯

336

## 晩年の教化・和讃頌

親鸞が長い関東の伝道を切り上げて故郷京都に帰ってきたのは六十一・二歳の頃でした。

このころ既に権力の中核であつた後鳥羽上皇などは隱岐へ流され、それを支えていた藤原貴族も衰退。

そのうえ全国的な飢饉や流行病の蔓延で、京の巷には餓死者の死体があふれていました。

全国各地からその京都へ、流民難民というかたちで雑多な庶民が押し寄せてきました。その人たちは今日を生きるためにいろいろな生業に暮らしました。盜賊・神人（じにん）・わらわ・つぶて・遊び女・くぐつ・白拍子・人さらい等など。

京都はまさに懸命にもがき生きようとする庶民の堀縄（るっぽ）のような街でした。

だから有能な文化人や宗教家の多くは混乱の京都を逃れて、新興地である関東その他へ散らばって行きました。そのような京都へ帰ってきた親鸞は、むしろそうした庶民のなかでお念仏をい「しょ」といきました。その具体的な証拠が『和讃』というかたちで残されています。

『和讃』は平安時代の中頃から流行し、七五調、四句一首、「今様」とよばれる法文歌（宗教の歌）で、例の「いろはうた」もその一つです。

『梁塵秘抄』はその歌を集めた歌集です。

私は常にいませども「うつならぬぞあはれなる人の音せぬ曉にほのかに夢に見えたもう

弥陀の誓いぞ頼もしき 十惡五逆の人なれど ひとびと名を称ふれば来迎引接  
疑わず

遊びせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子供の声聞けば 我が身さえこそゆるがるれ

もともと仏教にはインドのことばで詠う「梵唄」。中国語で仏の徳を讃える

「漢讃」（頌讃）などがあり、親鸞自身比叡山でこれを習得していたと言われています。

『和讃』は、親鸞にとっては「やわらげぼめ」とみずから振り仮名をつけているように、漢文で書かれた釈迦や高僧たちのおしえを、庶民に解かりやすく大和ことばにヤワラげて詠い、だれもと一緒に融和（とけあって）合唱しようという意図で作られたものです。

五百五十首ほどあります。一人の作品としては親鸞のこの和讃が史上最多です。

『淨土和讃』百十八首（七十六歳）  
「讀阿彌陀仏偈和讃」四十八首  
「淨土三部經和讃」  
「諸經阿彌陀仏和讃」  
「現世利益和讃」  
「勢至和讃」（法然聖人の徳を讃える）

『高僧和讃』（百十九首）（七十六歳）  
正信偈「依釈段に相当）

『正像末和讃』百十六首（八十五歳以後）

釈迦滅後、仏法・世間・人間とも、次第に衰頬下落し、今は末法濁乱の時代になっている。濁惡のこの私が救われるには阿彌陀仏の本願以外にはない。いまその本願に遇うことができたのは如來大悲の恩徳でありたくさんの中僧がたのおかげであつたと、例の「恩徳讃」で結んでいます。

加えて

「皇太子聖德奉讃」十一首

「愚禿悲嘆述懷和讃」十六首  
「善光寺和讃」  
その他  
「皇太子聖德奉讃和讃」百十四首

## 「帖外和讃」九首

最後に「自然法爾章」という法語。

この政治的混乱の時代を、生活難のなかで必死に生きる都の庶民たちのなかで、共に苦しみ、ともに救いを求めて生きた親鸞が、そのなかで聞き続けた淨土のおしえを詠い続けたその記録がこの膨大な五百六十首にもおよぶ『親鸞和讃集』であります。



「もつたいない」って、本当はなんのことだ、たんだろう。

日本独特のことばで、外国にはない言葉。このことは正直、外国のことばには翻訳できないのだそうです。

昔から日本の国に語り伝え言い残してくれた「こここのことば」ということで、大伯父にあたる年寄りに聞いてみました。

それにしても、このことばの意味あいが知りたい。

大伯父にあたる年寄りに聞いてみました。

「文字に書けば〈勿体ない〉と書く。この勿体、漢字で書いて読めば〈物体ない〉と書き、漢の音で読むとブッタイじゃが、これを吳の時代の発音すると〈モッタイ〉となる。単なる物体ではなく〈そのものがら〉〈そのものの本質〉。〈そのもののがら〉〈そのもののち〉〈価値・ねうち〉など」ということを表した。

例えば、人が死んだらどうなるのか。天国に召されたり、黄泉の国にいったり、あるいはお淨土に往生する、そのものがらはなにか。この肉体が行くのか。魂か。またエネルギーなのか。〈そのものがらは〉なんだろう。そのことを論議するとき〈そのもつたいは?〉と使った

おばあちゃんたちは、申し訳ありませんごめんなさいと、そういう世界で、山川草木あらゆるものといのちを語らないながら生きていたのではないでしょうか。

環境資源の尊重。エコ（環境保護）が緊急課題である今日、おばあちゃんのこの「もつたいない」に学ばねばならないのではないかと痛感致しました。

そのような屁理屈はどうでもよろしい。おばあちゃんの真似をして、とにかくこのことは頻繁に使って見ることです。そのうち見えてくるものがあるかもしれません。